



第 6 号

2013年3月15日



津山洋学資料館 館長 下山純正氏  
 津山洋学資料館 館長 下山純正氏  
 に津山に洋学が栄えた

## 美作国建国1300年

今年には美作国建国一三〇〇年。美作地域ではこれを記念していろいろの行事が企画されている。そこで、

背景について寄稿していただいた。なお、定期総会で「こうして津山洋学は栄えた」(仮題)と題して講演をしていただく。

## なぜ津山に洋学が栄えたか

津山洋学資料館 館長 下山純正

厳しい鎖国下にあつて、洋学が最も盛んになったのは江戸後期です。しかし、洋学者はいつも迫害におびえていました。研究の条件として恵まれたものは何一つなかったと思います。そのような状況下で、洋学を志し、しかもその大家になるのは、並大抵のことではありません。

そうした多くの困難を乗り越え、全国に名をはせた洋学者が、津山市を中心とする美作地域から多数出てくることは、私どもにとつても大きな

な誇りなのです。

それではなぜ、津山藩で洋学が栄えたのでしょうか。それについて、私見を述べてみたいと思います。

先ず第一は、歴代の藩主を初め、藩の重臣たちが、学者を大切にし、物心両面から援助したことです。

寛政五年(一七九三)、藩医の宇田川玄隨が、わが国最初の西洋内科書となった『西説内科撰要』を刊行した際、時の藩主松平康哉は、金十五両を賞与し、「次頁へ」



## 平成25年度定期総会のご案内

日時 4月24日(水) 受付12時30分

場所 山陽新聞社さん太ホール

総会13時～

平成24年度の事業、決算報告。新年度の事業計画、予算、会則改正の審議

記念講演13時45分～

「犬も歩けば棒にあたる」～吉備国の話題

講師 佐藤光範氏(岡山歴史研究会顧問)

記念講演15時15分～

「こうして津山洋学は栄えた」(仮題)

講師 下山純正氏(津山洋学資料館館長)

この記念講演は、美作国建国1300年記念事業の後援を受けています。

参加費 会員無料 一般500円(資料代)

## 歴研 展望

を超えております。

一昨年は全国大会を開催し、昨年は奥州白河大会で来賓祝辞の役割をいただきました。このことは全国的に認知された歴史愛好家団体に位置づけられつつあるものと意を強くしております。

今年、岡山県では美作国建国千三百年という節目の年です。それに呼応した活動を展開していくとともに、郷土の偉人山田方谷さんのNHK大河ドラマ化にも積極的に関わっていかねばと考えるしております。そして、全国初となる県下の歴史関連団体データベースをホームページに掲載情報発信を図ります。

また、新しい取組として企画委員会の提案を基に、会員の中から講師役を務めていただき、その内容を勉強するとう参加型のミニ勉強会を準備しております。

引き続き活動の充実を図っていくためにも、皆様のご理解、ご協力、ご尽力をお願い申し上げます。

(会長 天野勝昭)

「前頁から」「草創の著述物をして家名を高めた」と、その功績をたたえています。玄随の養子となった玄真が、文化二年(一八〇五)に当時のベストセラー外科書となった『醫範提綱』を出版した時には、「後進の基本になるような書物を著した」と褒め、「出版費が相当かかるようだから、勝手(会計係)に話して金



写真解説・宇田川玄真の著した『醫範提綱』と『内象銅版図』。医学書に初めて銅版による解剖図を使ったことで知られ、江戸時代を通じて最高の解剖学書と評価されています。

を借れ」と言ったことが記録にあります。

また、注目するのは、津山藩では藩士の子弟が遊学する際、年額金三両から五両の学費を支給していることとです。もちろんこれは洋学に限らず、漢学・医学・武術など諸方面にわたっています。今日の奨学金制度がすでにあつたわけです。

第二は、宇田川家にしろ、箕作阮甫を筆頭とする箕作家にしろ、父の業績を子が継ぎ、それを孫がさらに深め広げるといふように、蘭学を家業として、継続的に発展させたことです。

全国に優れた洋学者の出た町はありませんが、多くは単発的で、後継が続かなかつたことを考えれば、津山の場合は珍しいケースと言えます。

第三は、津山の洋学者は、宇田川玄真以降、次々と幕府の天文台や蕃書調所などで、出役として翻訳の業務に当たっていました。その時々

の必要に応じて、親藩抱え、つまり体制側の有能な洋学者として、幕府の仕事にも手を貸していたわけです。津山の洋学者たちは、幕府を批判し

て非業な死を遂げた渡辺崋山や高野長英などのようなドラマ的なものがなく、人々の話題にのぼることが少なかったとも言えます。しかしその反面、地道に学問を究め、学者としての業績を積み重ね、その内容は、量・質共に膨大なものになったのでした。

さらにまた、官学の側にいたことで、鎖国から開国への大転換に際し、新しい洋学への露払いの役割を負い、自らの手で新時代の扉を開くという、歴史的な役割を演ずることにもなるのです。

最後になりますが、津山は内陸の山間地であっても、古くから出雲街道の人の往来や吉井川の舟運によって、上方や他地域の進んだ文化を受容する機会に恵まれていました。そういうことで、辺地にありがちな閉塞性や後進性は少なかったと考えられます。

『解体新書』刊行以降広がる「江戸蘭学」。その黎明期からこれに深く関わり、近代諸科学発展に貢献した郷土先覚の動静は、藩の文教振興政策とも相まって、若者たちを鼓舞

させたことでしよう。もちろん明確に言い切ることはできませんが、これが俗に言われる「津山の洋学」発展の要因であつたことは確かかなようです。

### 署名一万五千人集まる

#### 「山田方谷」の大河ドラマ化

岡山歴史研究会は今年度のテーマに「山田方谷」を掲げた。定期総会では「山田方谷を語る」パネルディスカッション、秋には山田方谷の足跡を辿る探訪会。そしてNHK大河ドラマ化実現全国百万人署名運動に取り組中です。当会では既に約一万五千人の署名を集めました。

昨年末に岡山駅、二月倉敷駅(写真左)の署名活動に参加しました。国も地方も財政再建は今の時代が求めるテーマです。ドラマ化が実現すること

で高梁や岡山が盛り上がり、地域活性化が図られます。実現のために引き続き頑張ります。



# 新邪馬台国サミットが開かれる 邪馬台国は吉備か

昨年末、岡山にて、「新邪馬台国サミット」が開かれた。邪馬台国の所在地について「近江」説の澤井良介氏(滋賀県守山市在住)、「山陰」説の田中文也氏(鳥取県境港在住)、「吉備」説の若井正一氏(静岡県掛川市在住)がそれぞれ講演した。「吉備」説の若井正一氏は「大和・狗奴

国による吉備・邪馬台国の制圧が国家統一の端緒となった」と題して講演。その要旨は以下の通りである。

## 【要旨】

邪馬台国なる国が二、三世紀のわが国にあったことは中国の『魏志』倭人伝による。その所在地について九州説と大和説とがある。これに関し、我が国の歴史書『古事記』・『日本書紀』が疎んじられてきた。すべ



演者 若井正一氏

ての歴史資料を総合して判断する必要がある。総合すると、邪馬台国は吉備に、その宿敵、狗奴国の中心が奈良盆地の大和にあった。三世紀後半に大和王権が吉備の王権を打倒することで統一国家が産声を上げたと考ええる。

『魏志』倭人伝は順に、邪馬台国及び諸国の地理、倭人とその社会、「倭国乱」と卑弥呼の治世、卑弥呼による对中国外交、卑弥呼による対狗奴国戦争とその後の展開からなる。

まず朝鮮半島を離れて対馬国、一大国(吉岐)、末廬国(肥前国松浦郡)、伊都国(福岡県糸島郡)、奴国(福岡県春日市)、不彌国(福岡県宇美町)、投馬国(所在地不明)、邪馬台国との記述。不彌国から水行二〇日、投馬国、さらに水行一〇日、陸行一月で邪馬台国。卑弥呼の統治領域は対馬、吉岐、北部九州を含む三〇か国であること。狗奴国は含まれていないことは注目に値する。「女王国

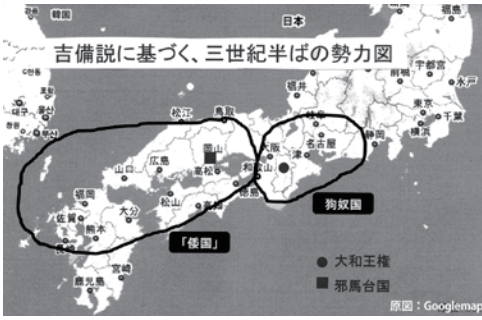
の東、海を渡ること千余里、復、国あり」とあることから邪馬台国は臨海地にあると読み取れる。奈良盆地は臨海地ではない。人口について奴国は二万余戸、所在地不明の投馬国は五万余戸、邪馬台国は七万余戸とある。九州説に立てば、三世紀前半に九州内に二国があることになる。が、該当する遺跡は見つかっていない。

吉備の榎築弥生墳丘墓である。これは傑出した個人、すなわち王の登場である。

前後の『後漢書』倭人伝、『晋書』

倭人伝も併せ読む必要がある。西暦二六六年から四一三年まで倭で何が起きていたのか書かれてない。約一五〇年間が空白である。五世紀初頭に中国南朝に朝貢したのが「倭の五王」である。これは通説通り大和王権だろう。問題は二六六年以前に中国王朝と好を通じていた卑弥呼の王権である。『魏志』倭人伝から卑弥呼の王権は魏と文書を用いて外交していたことがわかる。一方、大和王権が本格的に漢文を学び始めるのは4世紀末以降である。従って、卑弥呼の王権と大和王権とは別である。すなわち、大和説は誤りである。二世紀になると中国地方に大型の墳丘墓が作られた。出雲の西谷3号墓、

中国鏡の出土は一世紀までは北部九州に偏在するが、二世紀以降は西日本全体に拡散し、三世紀前半になると中心は近畿地方に移る。この時期、河内を起源とする庄内式土器が北部九州から大和まで広範囲に移動した。これらより、一世紀以降、広域的な地域連携が見られ、二世紀になると、とりわけ中国地方では、王権を現出させた。そして三世紀前半になると広域的な政治統合が実現した。その一つが卑弥呼の倭国であり、また一つが大和王権である。考古学者は倭国が三世紀前半の最も強大な国としているが、『魏志』倭人伝によれば倭国は二四七年には国力の衰えが露わである。注目は二世紀。倭国の都は二世紀も三世紀も同じである。すなわち卑弥呼・台与の都である。以上から邪馬台国は、第一に北部九州から日本海ないしは瀬戸内海ルートに至る場所。第二に臨海地、第三に大和の北ないしは西、第四に二世紀に最大の政治権力が存在した



と推定される所となる。この点で吉備地方が浮かぶ。臨海地であり、独立した墳丘墓がある。

吉備には二世紀後半に構築弥生墳丘墓が築かれる。これは弥生時代を通して全国的に最大規模の墳丘墓であり、前方後円墳の祖形である。もうひとつ重要なのは特殊壺・特殊器台の出現である。これは葬送祭祀に用いられた祭具である。祀りの対象が神から人へ変わったことの考古学的証である。葬送祭祀は古代王権の存在の根幹の儀式である。従って、

特殊壺・特殊器台の変遷は吉備の王朝の消長を表す。それは三型式に區別され、年代的な変遷を映している。最後の宮山型は畿内に多く出土する。箸墓古墳の考古学的推定は三世紀後半である。三世紀の

後半に王権の象徴が吉備から大和へ受け継がれたことを意味する。卑弥呼の時代である三世紀前半は向木見型の時期と推定される。この時期の墳丘墓は楯築に比べて小さいが、分布する領域は広い。吉備、畿内地方にある。その内、最大は長さ40m、

高さ4mの鯉喰神社弥生墳丘墓である。これこそ楯築のそれを継ぐ吉備の大首長、すなわち卑弥呼の墓と結論づけられる。

### 記・紀にない邪馬台国

『古事記』・『日本書紀』には邪馬台国の記録はない。三世紀後半の箸墓古墳に始まる古墳時代が大和から全国へ拡散している。箸墓古墳が作られたのは崇神天皇の治政である。この時代に大和政権は各地の平定に成功した。そのため、崇神天皇は「初

国知らしし御真木天皇」(初めて国を統治した天皇)と称えられている。古墳時代の始まりと大和王権の主役時代の始まりが一致する『古事記』、『日本書紀』の皇統譜に卑弥呼・台与に該当する女帝は存在しない。また、魏との外交の記述は一切ない。

崇神天皇の即位時は疫病の流行や内部の反乱が続いた。これを救ったのは孝靈天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命である。その陵こそが箸墓古墳である。崇神天皇は体制を固め、満を持し、四道將軍を遣わして周辺国を平定した。その一人が吉備津彦命である。ここにおいて吉備を平定したのが大和王権である。最近の考古学

は箸墓古墳の造営は三世紀後半としている。とすると、崇神天皇の治政と卑弥呼・台与の時代が重なる。つまり、三世紀後半に卑弥呼・台与と戦っていたのは崇神天皇となり、吉備政権を滅ぼしたのは崇神天皇であった。要するに、吉備邪馬台国と戦っていた狗奴国は大和王権であると提唱する。

邪馬台国はヤマタイ国と読むが、本来はヤマト国であるというのが現代の国語学者の見解である。大國主神が出雲からヤマトへ上京する話がある。出雲が大和政権に服属したのはいか。二世紀において特殊壺・特殊器台が吉備、出雲の双方の古墳から

出土しており、すでに交流があったと考えられる。「御諸山の上に座す神」は「海を光し依り来る神」として登場する。海から現れた神であり、

海と深い関わりのある神である。瀬戸内市長船町にある美和神社が鎮座する広高山は古来「三輪の峰」と呼ばれる。その主神は大物主神である。ここでは祭りの前夜、宮司らは4km離れた牛窓町尻海で日の出を拝し、海水で禊をし、美和神社に戻って祭典を執り行う。主賓となるのはそこに常在している大物主神ではなく、年に一度海から来る神を示唆している。美和神社の境内には海に向かつて遙拝する場がある。『古事記』の神話で「海を光し依り来」て「御諸山の上に座す神」とはこの神と考える。神話でいう「御諸山」とは備前の「三輪の峰」のことになる。この山は弥生時代の吉備の中心部のほぼ真東に位置する。だとすると、「大和の青垣の東の山」という表現の「ヤマト」は吉備を指すことになる。『古事記』神話のヤマトとはかつてヤマトであった時代の吉備を指していると考えられる。(文責 楠敏明編集委員)

## カルまちの会 (略称)

カルチャーゾーンまちづくりの会代表

大河原 喬 (当会顧問)

岡山城の周辺に文化施設が集中している地域がある。これらがある9つの町内(中出石町・上出石町・下出石町・石関町・天神町・天神町南・兵団・弓之町・鷹匠町)会長らが中心となり、カルチャーゾーンまちづくりの会を5年前に結成した。

それらの施設はシンフォニーホール、オリエント美術館、県立美術館、後楽園、県立博物館、岡山城、天神プラザ、更に私設の夢二郷土美術館、林原美術館等で、岡山ではトップクラスの文化施設を持ったカルチャーゾーンを呈している。

こうした文化施設を最大限に活かす岡山の町づくりの活動を始めた。最初は旭川の未改修堤防の改修実施の提案を岡山市長宛てに行なうことから始まった。次第に、堤防に昇り降りの手すりの設置や小学校の登下校の通学道路の改修等、多くを手がけて来た。

これを契機に各大学がキャンパスを町内に開設した。岡山大学・就実大学・岡山理科大学・山陽学園大学の若い人達が集まりだし、文化的雰囲気、活動が盛り上がってきた。

最近の後楽園へ通じる中出石町の通りを人通りの多い、にぎわいのある町にすることに精出している。



◀カルチャーゾーンマップ

## 古代吉備の文様「直弧文」復刻

造山古墳蘇生会会長

定廣 好和 (当会会員)

造山古墳蘇生会は2009年5月に結成、丸4年が経過した。この間、地元の振興事業に参加。小学校の校外学習に協力、語り継ぎや世代間交流の促進、他府県の文化遺産視察、勉強会や講演会主催による高齢者の生きがい作り、古墳の草刈りや小学児童との奉仕活動、観光ガイドとしての啓発活動等々、文化遺産を活用した地域づくりを行ってきた。

これまでに多くの人的交流が出来たことは蘇生会の貴重な財産である。とりわけ我々を嬉しく、心和ませるのは、子供たちから寄せられる素朴な感想文、熱い日差しの中で頑張っているガイドの好評を耳にした時である。

千足古墳の石障取り出しに先駆け、2011年有志23名は千束石切場・長砂連古墳(熊本県上天草市)、鴨籠古墳(熊本県宇城市)、熊本県立装飾古墳館、石人山古墳(福岡県八女市)等を視察した。直弧文入り石障復刻を思い描いての視察である。それ以来、直弧文復刻に寄せる思いは膨み、千足古墳の文様を描き続けた。

1年半経た今、朝日新聞文化財団の助成、地域の人びとの協賛及び顧問の彫刻家 西平孝史氏の情熱に支えられ、直弧文入り石障の再現が達成される運び。古墳から石障を取り出したあの日、沈痛な面持ちで見送った地元住民。彼らに、4月6日(土)お披露目が出る。共に復刻の喜びを分かち合いたい。

## 団 体 紹 介



▶石障「直弧文」制作中のオブジェ

# 第五回 探訪会 岡山操山ウオーク

冬晴れの一月十二日(土)、四十四名が操山界隈を歩いて探訪しました。上原道弘、



▶岡山操山ウオーク、恩徳寺で記念撮影

## 今後の予定

- ・ 4月24日(水) 第25回定期総会
- ・ 6月1日(土) 津山市・美作市探訪
- ・ 6月25日(火) ミニ勉強会
- ・ 7月23日(火) ミニ勉強会

野崎豊両顧問の案内、岩井秀勝氏(会員)の先達による恩徳寺での安全祈願より出発しました。多くの古墳、古い寺院、古戦場あり、磐座(いわくら)ありで、古墳だけではない、多くの歴史遺産があることを知る探訪会となりました。素晴らしい展望の旗振り台古墳で昼食となり、旭川の下流域に広がる沖新田の展望を眺め、津田永忠の話聞きながら舌鼓を打ちました。

### お知らせ

## 津山市・美作市探訪

第二八回探訪会 6月1日(土)

行き先(予定)

- ・ 八咫(やた)の鏡発掘地
- ・ 三種の神器の一つ、「八咫の鏡」が発掘された場所(旧作東町)
- ・ 出雲街道(津山城東町並保存地区)
- ・ 江戸時代の町並が残る。箕作阮甫宅等の歴史的建造物を探索する。
- ・ 津山洋学資料館
- ・ 江戸後期から維新にかけ津山では多くの洋学者を輩出した。『解体新書』等の資料が展示されている。
- ・ 中山神社
- ・ 美作国建国以来の一宮。国の重要文化財が数々残っている。
- ・ 美作国分寺跡

### ●会員の出版物紹介● (過去一年以内)

- 『岡山県謎解き散歩』柴田一編著 新人物往来社文庫 ￥950
- 『中世吉備の法観念史』田中修實著 日本文教出版 ￥3,150
- 『またもやまたもや岡山雑学ノート』第9集 赤井克己著 吉備人出版 ￥1,260
- 漫画『会津に咲いた八重の桜 幕末のジャンヌダルク』 新島八重 原作 平茂寛(著者 岩下博美) 竹書房 ￥600
- 『吉備の中山を歩く』 熊代哲土、熊代建治共著 日本文教出版 岡山文庫 ￥903
- エッセイ集『ピレネーがみえてきた』 岩田超夫著 丸善出版 ￥1,200 + 税
- 冊子『東海～日向灘 4 連動地震の津波対策と総社市域の災害の歴史』 清水男著

●受賞 ● 当会顧問、芝村哲三氏(八七歳)は吉備中央町より有功表彰(地域文化功労賞)を受賞されました。

発掘調査が進んだ遺跡。

実施日 6月1日(土)

案内人 中村晋也・濱手英之  
アドバイザー 野崎・佐藤顧問

## 第二回 古墳まつり 直弧文様復刻オブジェ除幕式

日時 4月6日 10時～15時

※ 雨天の場合 4月7日

会場 造山古墳駐車場

和太鼓・ダンス・三味線餅つき等  
日本蕎麦・豚汁・おでん等の出店  
主催 造山古墳蘇生会

■編集後記■ 今年は美作国建国一三〇〇年。津山洋学を取り上げました。総会で記念講演を予定しています。昨秋の邪馬台国サミット。吉備説の根拠が興味深かった。ページを割きました。次号より楠敏明氏が編集長として担当します。山本事務局長とのコンビで新展開を期待しています。(山崎)

発行 岡山歴史研究会  
代表 天野勝昭  
編集長 山崎泰二  
事務局 〒701-11332  
岡山市北区平山 844-1 86山本方  
電話 086-287-6226

